

# 琉球大学学術リポジトリ

## 小学生と留学生の交流活動による異文化理解教育の 教育効果に関する一考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2010-07-23 キーワード (Ja): 異文化交流, 異文化理解, 異文化受容 キーワード (En): intercultural education, intercultural understanding, acceptance of different culture 作成者: 金城, 尚美, Kinjo, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/17608">http://hdl.handle.net/20.500.12000/17608</a>

# 小学生と留学生の交流活動による 異文化理解教育の教育効果に関する一考察

金城 尚 美

## 要 旨

日本人または日本人学生と留学生に教育的な交流の場を提供し、参加者相互の異文化理解を促進する教育実践がさまざまな形で行われているが、その意義と効果を明らかにする実証的な研究の蓄積は少ないことが指摘されている（岩井 2006）。そこで本研究では、小学校で行った6年生（32名）と留学生（13人）の交流活動の事前と事後に調査を行い、小学生の留学生に対するイメージの変化と、異文化を受容する態度の変化を調査し検証した。その結果、留学生に対するイメージの変化と異文化受容態度の変化に統計的に有意な差が現れ異文化理解を目的とした教育の効果が示された。また留学生との交流前に手紙の交換、ビデオ・レターの交換、質問交換などの事前のやり取りを通し、小学生が留学生と交流することについて感じている不安を軽減することができ、交流活動がより円滑に進められることがわかった。この結果から、交流会前のやり取りの重要性が示唆された。

【キーワード】 異文化交流, 異文化理解, 異文化受容

## 1. はじめに

日本に滞在する外国人登録者数の増加に伴い、多文化共生の必要性が高まるといふ社会的な事情を背景に、異なる文化・価値観を持つ他者を受け入れる受容性を育成する上で、異文化理解教育が重要な役割を果たすと考えられるようになった。そこで2002年度から全国の小・中学校や高校で「総合的な学習の時間」が導入されたのに伴い、国際理解教育が広く実施されるようになってきている（佐藤 2003）。特に、実際に交流することを通じた実践的な学びはより効果的であると考えられ、小・中学校等で取り組まれている（久保田 2003）。その実際の交流相手として留学生と交流する学校または学級が増えている。

本学の留学生にも、地域の小・中・高校から交流の申し込みが毎年のようにあり、可能な限り要望に応じている。言うまでもなく、地域の人との交流は、留学生にとっても日本語を実際の場面で使えること、異文化交流をする機会が得られるなどの

教育的意義があり、相互に学ぶことが可能だからである。このような日本人と留学生との交流が有意義な活動であることは、実践例とともに報告されている（花見他 2001；佐藤 2003；上田 2003；金城 2005 等）。

しかしながら、これまでは交流した生徒・学生双方にアンケート調査形式で交流の印象や感想などをたずね、教育的意義を示し、問題点等を指摘、検討する研究（上田 2003；鈴木 2005；金城他 2006 等）が多く、その教育効果については客観的に測定できる方法が確立されていないため、実証的に示すことはできなかった。

そこで本研究では、留学生と小学生との交流を実施するにあたり、異文化コミュニケーション能力の一つとして必要とされる異文化を受け入れる受容性という観点からその教育効果を実証的に示す試みを行った。今回、調査対象としたのは小学生である。具体的には、留学生と接する前と後で小学生が抱えている留学生（外国人）に対するイメージがプラスの方向へ変化し、異文化に対する受容性が高まることを統計的な分析により示す。それにより、小学生と留学生との交流が異文化理解を促進するために貢献できることを示す<sup>(1)</sup>。また、交流を円滑に進めるために留学生との交流に際し不安要素は何かを探り、心理的負担を可能な限り軽減させるような交流の方法を提案する。

## 2. 研究の背景

宮本・松岡（2000）は、留学生と日本人学生との異文化コミュニケーション活動の促進を目的とした授業を実践していく中で、多文化状況（文化背景が一樣でない多文化が存在する状況）におけるコミュニケーション教育の効果を測る検証法が確立されていない点が問題であると指摘しその必要性を述べている。同様に中村・園田（2004；47）も「異文化交流活動を研究として確立させるための客観的な測定指標の開発および利用」を検討すべき課題として挙げている。このように異文化理解教育として、異文化交流活動、異文化コミュニケーション活動は盛んに行われているものの、教育効果を客観的なデータにより検証する方法はまだ確立されていないのが現状である。ではどのように異文化交流活動の教育的な効果を客観的に示すことができるのであろうか。

御堂岡（2002）は異文化接触において、ステレオタイプや偏見は物事をそれらに当てはめて単純に解釈することになり、時には異文化コミュニケーションを阻害する行為につながると述べ、異文化理解を相互に深めるためには、ステレオタイプや

偏見に気づくこと、それらに固執せず柔軟性を持つことが重要であると指摘している。小学生が交流前にもっている留学生に対するイメージは、一種のステレオタイプまたは偏見があると考えられる。留学生と接することにより自分のイメージが実際とは異なるということに気づくことが、異文化理解のためにまず重要だと考えられる。そのため、本研究においては、交流会に参加した小学6年生の留学生に対するイメージの変化を調べ分析することにした。イメージに変化があったことが検証されれば、ステレオタイプや偏見に気づくことができ、異文化を受け入れる柔軟性、受容性が生まれたと考えられ、一つの教育効果が示される。

さらに、相互理解は、まずコミュニケーションをとることが必要であるが、異文化を持つ人を受け入れうまくコミュニケーションをとるためには、まず異質な物に対して寛容であることや、相手に対して適切な行動や態度を取ることが重要である（上原 2002）。本研究では、自己の持っているイメージの変化が内的な寛容性や柔軟性を生んだかどうかは、異文化を持った人を受容する態度や行動に現れるのではないかと推測した。それを確かめるために、「外国人の転校生がクラスにやってきたら、どうするか」という具体的な状況を設定し、転校生に対しどのような行動をとるかを質問することにより検証した。

### 3. 研究の目的

異文化理解を目的に行われた留学生と小学生の交流活動の教育効果を客観的に検証すること、また不安要素を明らかにすることにより、心理的な不安を軽減し交流がより円滑に進められるような方法を見だし、提案することが本研究の目的である。留学生と交流することにより、異なる文化を持つ外国人に対する小学生のイメージをプラスのイメージに変化させることは、警戒心が薄れ他者（他文化）を受け入れる、または受け入れようとするきっかけを与えること、動機づけをすることにつながると考えられる。

さらにそのイメージのプラスへの変化は、異なる文化・価値観を持つ他者を受け入れようとする受容性を高めることにもつながり、異文化を受容態度にも変化があらわれると予想される。本研究の調査により、次の3つの点を明らかにする。

- (1) 小学生が留学生（外国人）に持っているイメージの変化
- (2) 小学生の異文化に対する受容態度の変化
- (3) 小学生が留学生と交流する際の不安要素

(4) 心理的な不安を軽減するために有効な手段

以上のことが客観的なデータにより検証することができれば留学生との交流が異文化理解教育においてどのような教育効果があるかを示すために有効な方法の一つとなる可能性が示唆されるだろう。

4. 調査の概要

沖縄県の中部地域にある Y 小学校 6 年生と本学留学生の交流会を企画し、その前後にアンケート調査を実施した。そのアンケート調査で得られたデータを分析し、考察を行った。調査の方法、実施時期、調査内容は次の通りである。

- (1) 調査対象：留学生との交流会に参加する（した）Y 小学校 6 年生 32 名  
（男子生徒 18 名，女子生徒 14 名）
- (2) 調査方法：交流する前と，交流後に，質問紙を用いたアンケート調査を担当の教師に実施して回収してもらった。
- (3) 調査内容：①留学生と交流するにあたって，不安があるか。どのような不安かについて問う質問（事前調査のみ）  
②留学生に対するイメージを問う質問（事前・事後）  
③異文化受容性を確かめる質問（事前・事後）  
④その他

(4) 調査日程と交流会

調査と交流会の日程および交流会での活動については表 1 に示した通りである<sup>(2)</sup>。

表 1 調査手続きと交流会について

実施日	手続き	場所	内 容
2005年11月25日（金）	事前調査	Y小学校	アンケート調査
2005年12月8日（木）	交流会	Y小学校	お国紹介（グループ）・外国の子どもの遊びで遊んでみる（全体）・給食（グループ）・掃除（グループ）
2005年12月9日（金）	事後調査	Y小学校	アンケート調査

4. 1. イメージ調査について

本研究では，言語による尺度を用いた SD 法を用いた質問紙調査により留学生のイ

メージを調べた。調査項目となる形容詞対は、名嘉等（1995）の大学生の持つ留学生に対するイメージ調査の研究結果により抽出された、第一因子（信頼性）、第二因子（進歩性）、第三因子（力量性）の三因子の各項目を基に選択し14の形容詞対を用いた。回答方法は、それぞれの形容詞対のどれに当てはまるか、またはどちらでもないかを被調査者に3段階評定してもらった。

#### 4.2. 受容性を調べる調査について

生徒の持っている留学生に対するイメージの変容により、異文化を受け入れる寛容性や受容性が高まるのが推測されるが、それを検証しなければならない。しかし生徒の内的な変化を一人ひとり直接観察することができないため、本研究では異文化接触場面を想定した質問をすることにより確かめることにした。特に異文化接触場面では、他者と効果的、適切に相互作用できるようコミュニケーションを図ることが重要である（山岸他1992）ことから、本調査では「外国人の転校生がクラスに入ることになったら、どうするか」という場面設定で、その転校生との関わり方を多肢選択式で回答してもらった。このような場面設定は被調査者が小学生であることを考慮にいたったものである<sup>③</sup>。

### 5. 調査結果

#### 5.1. 不安要素

交流会を実施する2週間前に事前調査を実施した。調査票は総合学習の授業の時間を利用し、生徒のクラス担任が配布し、回答後、回収した。交流予定の32名の生徒のうち、1名が調査当日に欠席だったため、31名の生徒が調査票に回答した。

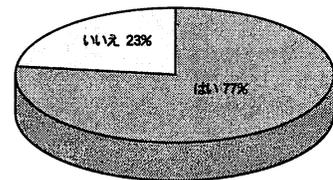


図1 留学生との交流に不安があるか

「留学生と交流することで、不安があるか、あるとすればどのようなことが不安か」を質問したところ、全体（31人）の約77%にあたる24人が「ある」と回答した（図1）。さらに、「不安がある」と回答した24人に対し、「どのようなことが不安か」をたずねたところ（選択式）、表2のような結果が得られた。24人の回答者の「不安に思う点」の件数をみると16人の回答者が「英語ができないこと<sup>④</sup>」に不安を感じていると答え、最も多いことがわかった。この質問項目は複数回答可能な設問であり、表2の「回答比率」の値は、合計回答件数（102件）に対する相対度数を表

している。またケース比率には「各回答項目（1～10の項目）」を選択した回答者の割合を示している。ケース比率は「留学生と交流することに不安を感じている」と回答した24人に対する相対度数を表している。したがって、回答者のうち、「英語ができないこと」を不安に感じていると回答した生徒が最も多く、66.7%となっている。

次に「うまく話せるか」（62.5%）、「言葉が通じるか」（54.2%）、「緊張しそうなので」（54.2%）と続き、上位に言葉に係わる不安、つまりコミュニケーションがうまくとれるかどうかについての不安を抱いている生徒が多いことがわかった。このことから、外国人とのコミュニケーション手段として英語等の外国語を媒体として用いなければならないという先入観を持っていることがうかがえる。

表2 留学生と交流することで不安に思うこと

	件数	回答比率	ケース比率
1. 英語ができないこと	16	15.7%	66.7%
2. うまく話せるか	15	14.7%	62.5%
3. 言葉が通じるか	13	12.7%	54.2%
4. 緊張しそうなので	13	12.7%	54.2%
5. 友達になれるか	11	10.8%	45.8%
6. 経験がないから	10	9.8%	41.7%
7. 年上の人と話すこと	8	7.8%	33.3%
8. 留学生の性格が分からないので	8	7.8%	33.3%
9. 交流がおもしろいかどうか分からないので	4	3.9%	16.7%
10. 国の習慣がよく分からないので	4	3.9%	16.7%
計	102	100.0%	425.0%

(Valid cases=24人) (複数回答)

## 5.2. 留学生に対するイメージの変化

留学生に対するイメージについて14項目の形容詞による語彙を用いたSD法による調査を行った。事前調査時に1名、事後調査時に1名の欠席者がいたため、30名を有効データとした。それぞれの項目ごとに選択肢を点数化（プラス・イメージを2点、マイナスイメージを0点、どちらでもないを1点）し、その平均値を求めた。そのデータをプロフィール化して図示したのが図2である。このグラフから、交流会前と後で小学生が留学生に対して持っているイメージが変化したことがわかる。

次に、この変化が統計的に有意であるかどうかを調べるために、t検定を行った。

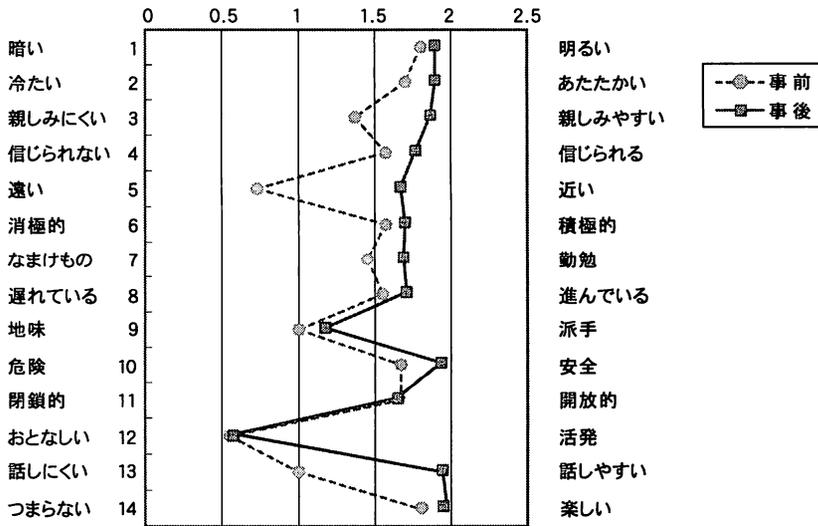


図2 留学生に対するイメージ

表3 留学生に対するイメージ

(n=30)

変数名	事前	事後	変化	t-test
1. 暗い — 明るい	1.80±0.41	1.93±0.25	0.13±0.43	ns
2. 冷たい—暖かい	1.70±0.47	1.93±0.25	0.23±0.43	**
3. 親みにくい — 親しみやすい	1.37±0.72	1.90 ± 0.51	0.50±0.73	***
4. 信じられない — 信じられる	1.57±0.57	1.80±0.41	0.23±0.57	*
5. 遠い — 近い	0.73±0.79	1.70±0.47	0.97±0.97	***
6. 消極的 — 積極的	1.57±0.57	1.73±0.45	0.17±0.14	ns
7. 危険 — 安全	1.67±0.55	1.97±0.18	0.30±0.60	**
8. 閉鎖的 — 開放的	1.67±0.48	1.67±0.55	0.00±0.64	ns
9. 話にくい — 話しやすい	1.00±0.74	1.90±0.40	0.90±0.76	***
10. つまらない — 楽しい	1.70±0.54	1.93±0.25	0.23±0.57	*

\*p<.05    \*\*p<.01    \*\*\*p<.001

その結果, 0.1%の有意水準 ( $p < .001$ ) で「親みにくい—親しみやすい」「遠い—近い」「話にくい—話しやすい」の3項目が有意であった(表3)。また1%の有意水準 ( $p < .01$ ) で、「冷たい—あたたかい」「危険—安全」、5%の有意水準 ( $p < .05$ ) で「信じられない—信じられる」「つまらない—楽しい」が有意であった。これらの結果から、留学生と交流することにより、小学生が留学生に対して持っていたイメージに変化が現れたと言える。その変化は、「遠い存在から身近な存在へ」「親みにくい印象から親しみやすいという印象へ」マイナスのイメージからプラス方向に変化している。

### 5.3. 異文化の受容性

異文化に対する受容性態度について調べるために、「外国人の転校生がクラスにきたら、どうするか」という質問をした。11項目の選択肢が設定されており、複数選択する方法で行った。事前調査時に1名、事後調査時に1名の欠席者がいたため、その2名の生徒の分を除いた30名分をを有効データとした。その集計結果は、表4と表5の通りである。

複数回答可能であるため、表4と表5の「回答比率」の値は、合計回答件数（事前121件、事後173件）に対する相対度数を表している。またケース比率は「各回

表4 異文化受容態度の調査結果（事前）  
(n=30)

	件数	回答比率	ケース比率
1. 日本語を教えてあげる	20	16.5%	66.7%
2. 国のことをいろいろ教えてもらう	16	13.2%	53.3%
3. 話しかけてあげる	14	11.6%	46.7%
4. 休み時間に一緒に遊ぶ	13	10.7%	43.3%
5. 分からない場所を案内してあげる	13	10.7%	43.3%
6. 持っていないものを貸してあげる	11	9.1%	36.7%
7. 家が近かったら一緒に帰ってあげる	10	8.3%	33.3%
8. 様子を見ているだけ	9	7.4%	30.0%
9. 給食と一緒に食べる	6	5.0%	20.0%
10. あまり気にしない	5	4.1%	16.7%
11. 授業中、分からない所を教えてあげる	4	3.3%	13.3%
計	121	100.0%	403.3%

表5 異文化受容態度の調査結果（事後）  
(n=30)

	件数	回答比率	ケース比率
1. 休み時間に一緒に遊ぶ	24	13.9%	80.0%
2. 日本語を教えてあげる	21	12.1%	70.0%
3. 分からない場所を案内してあげる	21	12.1%	70.0%
4. 話しかけてあげる	20	11.6%	66.7%
5. 持っていないものを貸してあげる	20	11.6%	66.7%
6. 家が近かったら一緒に帰ってあげる	19	11.0%	63.3%
7. 給食と一緒に食べる	15	8.7%	50.0%
8. 国のことをいろいろ教えてもらう	15	8.7%	50.0%
9. 授業中、分からない所を教えてあげる	12	6.9%	40.0%
10. 様子を見ているだけ	4	2.3%	13.3%
11. あまり気にしない	2	1.2%	6.7%
計	173	100.0%	576.7%

答項目（11項目）」を選択した回答者の割合を示している。ケース比率は、回答した30人に対する相対度数を表している。したがって、事前調査では回答者のうち、「日本語を教えてあげる」を選択した生徒が最も多く、66.7%となっている。同様に事後調査では、「休み時間に一緒に遊ぶ」を選択した生徒が最も多く、80%となっている。調査結果をみると、事前調査時より事後調査時の方が選択された件数が増え、ケース比率も高くなっており、外国人転校生との関わり方に積極性が現れている。

一方、外国人の転校生に対して、「様子を見ているだけ」「あまり気にしない」というケース比率は、事前調査時より事後調査時の方が低くなっており、傍観者的な消極性が薄れた生徒もいることを示している。これらのことから、留学生との交流後に「外国人の転校生」に対する受容態度に変化がみられたと言える。

次に、これらの変化が統計的に有意かどうかを確かめるために、t検定を行い分析を行った。その結果を表6に示す。「休み時間に一緒に遊ぶ」のケース比率が、事前で43.3%、事後で80%と変化が最も大きかったが、t検定の結果により、その差は有意であることが示された ( $p < .001$ )。

一緒に遊ぶという行為は、自分の和の中に入れるという行為であり、転校生を「仲間」として見ていると解釈できる。「持っていない物を貸してあげる」「給食と一緒に食べる」「授業中わからない所を教えてあげる」は1%の有意水準 ( $p < .01$ ) で、また「分からない場所を案内してあげる」「家が近かったら一緒に帰ってあげる」の2項目については、5%の有意水準 ( $p < .05$ ) で変化の差が有意であることが示さ

表6 異文化受容態度の変化

変数名	事前	事後	変化	t-test
1. 日本語を教えてあげる	0.68±0.48	0.71±0.46	0.04±0.43	ns
2. 国のことをいろいろ教えてもらう	0.57±0.50	0.50±0.51	-0.07±0.66	ns
3. 話しかけてあげる	0.46±0.51	0.68±0.48	0.21±0.63	ns
4. 休み時間に一緒に遊ぶ	0.43±0.50	0.82±0.38	0.39±0.57	***
5. 分からない場所を案内してあげる	0.43±0.50	0.71±0.46	0.29±0.60	*
6. 持っていないものを貸してあげる	0.36±0.49	0.68±0.48	0.32±0.55	**
7. 家が近かったら一緒に帰ってあげる	0.36±0.49	0.64±0.49	0.29±0.60	*
8. 様子を見ているだけ	0.29±0.46	0.11±0.32	-0.18±0.48	ns
9. 給食と一緒に食べる	0.21±0.42	0.50±0.51	0.29±0.54	**
10. あまり気にしない	0.18±0.39	0.07±0.26	-0.11±0.42	ns
11. 授業中分からない所を教えてあげる	0.14±0.36	0.43±0.50	0.29±0.54	**

\* $p < .05$     \*\* $p < .01$     \*\*\* $p < .001$

れた。この結果から、異文化に対して好意的になったことがわかった。「日本語を教  
えてあげる」「国のことをいろいろ教えてもらう」「話しかけてあげる」の3項目に  
ついては、事前調査時に既にケース比率が高く上位を占めているため、事後調査結  
果との差は有意とはならなかったと考えられる。

以上のことから、異文化を持つ留学生のイメージのプラス方向への変化が、異文  
化を受け入れる寛容性や受容性に影響を及ぼし、その後の行動や態度を積極的な方  
向へ変えて行く可能性があることが示唆される結果が得られた。

#### 5. 4. 不安の軽減

今回は、留学生と交流するにあたり不安に感じていると答えた小学生が約7割も  
いたため、その心理的な不安を軽減するために交流する小学生のクラス担当者と協  
力し、直接交流をする前の2週間ほどの間にまず手紙の交換（小学生から送付し留  
学生が返信）を行った。次にビデオ・レターの交換を行い、お互いが視聴するとい  
う間接的な交流を行うという段階を踏んだ。またお互いに質問したいことも交換し  
交流会の準備を行った。留学生から小学生に当てたメッセージ（各留学生が交流す  
る小学生全員に宛てた内容）は、簡単な自己紹介と交流会を楽しみにしているとい  
う内容であった。また留学生側が作成したビデオ・レターは交流会に参加する留  
学生一人ひとりの自己紹介と小学生へのメッセージ、校舎や食堂などの大学施設の簡  
単な紹介であった<sup>6)</sup>。

交流会後のアンケート調査で、「手紙、ビデオ・レターはどうだったか」質問し記  
述式で回答してもらった。その結果、「自分の言葉がちゃんとわかるかな（わかって  
もらえるか）心配でしたけど、ちゃんと分かってくれて嬉しいです。日本語が通じ  
るか、心配だったけど安心した。日本語がとてもきれいに書いててびっくりした。  
留学生ってこんなに日本語が書けるんだ。留学生でも日本語が話せることがわかっ  
て安心した。難しい言葉を使うのかと思っていた（が日本語で話せることがわかった）<sup>6)</sup>  
というような記述が33件あった。生徒の不安要素として「英語ができないけれど大  
丈夫か。うまく話せるか。言葉が通じるか。」が上位を占め留学生とのコミュニケー  
ションに不安を抱いている生徒が多かったが、留学生が書いた手紙を読んだり、ビ  
デオ・レターで事前に留学生の声を聴くことにより、安心感が得られたことがわか  
った。

また「優しそうな人たちでよかった。顔を見て安心した。ホッとしました。親しみや

すそうな人達だと思った。交流会が楽しみになった。よけいに会いたくなかった。」といったコメントが見られた。このように、事前の手紙とビデオ・レターのやりとり、質問の交換が不安に感じていたことをある程度取り除くことができ、交流への期待感を高めた様子がうかがえる。このような段階的な交流が、心理的な負担の軽減になると同時に留学生に対するイメージ、外国人とは英語を話さなければならないというような固定観念や偏見が間違っていたことに気づかせ、認識を新たにすることにつながったと考えられる。

## 6. 考察

本研究の調査の結果、異文化理解を目的とした小学生と留学生との交流活動が、小学生の持っていた留学生（外国人）に対するイメージをプラスの方向に変化させた（「親しみやすい」「近い」「話しやすい」「あたたかい」「安全」「信じられる」「楽しい」）こと、またそれによって異なる文化を持つ他者を受け入れる異文化受容態度にも変化をもたらしたことがわかった。これらの結果から、異文化を理解し受け入れるという教育的効果を検証することができた。

交流会に関する感想の中にも「世界の人々ってこんなに短い（近い）距離にいたんだなあと思いました。」という生徒のコメントからも留学生を身近に感じた様子が見える。また生徒達のクラス担当教員2名からも<sup>7)</sup>「子ども達は留学生の方々を身近に感じたようです。楽しいお兄さんお姉さんと感じ、かまえることなく安心し、楽しい経験をしたようです。」「国籍、年齢関係なく仲良くしたいという気持ちや受け入れようとする気持ちが芽生えた様子が見えた。」「人と関わり合うことの楽しさを感じていた。」「自分から話しかけて行くことの大切さ、コミュニケーションを取るものの大切さを学んだようだ。」というコメントがあったことから、異文化を受け入れようとする態度が現れていたことが裏付けられる。

また交流会に先立ち、手紙やビデオ・レター、質問の交換を行うというように交流に向けて段階を踏むことにより、生徒達の交流前の緊張感や警戒心を緩め、心理的な負担を減らすことができたことがわかった。小学校教師も生徒を観察し「おとなしく人見知りな子が多いクラスなので少し不安でしたが、留学生からの話をみんながどの子も身を乗り出し、聞いていたのには正直驚きました。」「自信と満足感を感じているようだった。」というコメントからも、交流会が活発に行われコミュニケーションがスムーズに行われたことがうかがえる。

事前のやりとりが、交流会で留学生と生徒が打ち解けやすくし、話題作りにもつながったことによりコミュニケーションを促すことにつながったと考えられ、そのことが、留学生に対するイメージや異文化を受容する態度への変化にも影響を与えたと考えられる。この点についての因果関係は本研究では示すことができなかったが、段階的な交流の方法の有効性、重要性が示される結果が得られたと言えよう。上田（2003）は国際理解教育を目的とした小学校と日本語教育の相互学習活動を成功させるためには、小学校側と留学生側の教員同士の情報交換と準備段階の活動が重要であると指摘するとともに、活動後の継続的な交流の必要性を指摘している。今回、交流会実施後、お互いにお礼の手紙を交換する機会を設けたが、その後の文通などのやりとりは、各学生に任せ強制はしなかった。留学生は留学期間が限られており、滞日期間はそれほど長くないため長期の交流は計画できないが、可能な限り交流が続けられるような教育的配慮をし、継続性を持たせられるような方法を見い出す必要がある。事後調査で「もう一度交流したいか」という質問に全員が「はい」と答えていたことや、感想として「もっと話したかった。もう一度会いたい。次に会えたらいろいろと教えたり案内したりしたい。また来てほしい。もっと質問したかった。」などのコメントがあったことから、動機が高まった機会を生かし、意欲を大切にできるような継続的な交流のあり方を実践することが望まれる。

## 7. おわりに

本研究では、小学生を対象に調査を行い留学生との異文化交流がどのような教育的効果をもたらすかということについて実証的に検証した。その結果、イメージの変化とそれと関連づけられた異文化受容態度を調べることが、日本人と留学生（または外国人）との交流活動の教育的効果を客観的に示す方法の一つとなる可能性が示唆された。今回は被調査者の数が少なく、外国人との接触経験の有無、外国訪問経験等と異文化の受容性との相関などの詳細な統計的分析はできなかった。また異文化に対する受容性や寛容性は、各個人の性格とも関連性があると考えられるが、今回はその相関を分析するに至らなかった。今後、様々な要因との因果関係等、研究を積み重ねて行くことにより、異文化理解教育の実践研究の分野で課題とされている教育効果や成果を実証的に示す方法をさらに検討し、研究を深める必要性もあると考えている。

今回は小学生を対象とした異文化理解教育という観点から、異なる他者を認める

という異文化理解に至る初期段階の取り組みとして有意義だったと考えられる。しかしながら言うまでもなく、異文化理解とその教育も一元的な単純なものでない。自文化についての認識を深め、異文化を受け入れるまで、自文化中心主義段階から文化相対主義段階へと段階的に発達していくのではないかという理論的枠組みが示されている(坂田2004)が、このような発達段階を踏むと考えれば、研究対象者を追跡するような長期に渡る縦断的研究も課題となるであろう。

異文化理解といった人間に内在する心的状態を観察し、客観的に測ることは容易ではなく、心理学の分野における研究手法などを応用する必要がある。誰に対し、どのような場面・状況において、何を目的とした、どのような教育の実践をし、どのような教育的効果が得られるのかといった基礎的な研究を積み重ねることが重要であり、研究課題である。

#### 註

- (1) 調査は、留学生と小学生の両方に行ったが今回は紙幅の都合上、小学生のデータの分析結果についてのみ考察する。
- (2) 今回、小学生と交流した留学生は、韓国(6人)、台湾(1人)、タイ(1人)、カナダ(1人)、米国(1人)、ウクライナ(1人)、ロシア(1人)、スウェーデン(1人)の計13人であった。
- (3) 選択肢の作成にあたっては、教育的配慮から拒絶するというような否定的な内容の選択肢は設けなかった。
- (4) 英語が世界的に共通語でありまず外国人と話す言語として英語を想起されることが多いため、また小学生は教科として英語を学習しておりその傾向が強いと推測されたため、本調査においては外国語とせず英語として質問項目を設定した。
- (5) ビデオ・レターを視聴した日に欠席した生徒が一人いた。
- (6) コメント引用部分の( )内は全て筆者が補足説明した部分である。
- (7) 生徒達への調査の他に、担当教員2名にも別途調査票によるアンケート調査を行い、交流会についての感想や意見等をたずねた。

#### 引用および参考文献

岩井朝乃(2006)「日本人大学生の「文化的他者」認識の変容過程—多文化クラスでの異文化接触体験から—」『異文化間教育』第23号, 異文化間教育学会, 109-124

- 上田美紀（2003）「留学生の小学校への訪問の意義と相互学習活動ーその構築への課題ー」『異文化間教育』17号，異文化間教育学会，アカデミア出版会，52-61
- 上原麻子（2002）「異文化コミュニケーション能力」石井敏他編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書，17-21
- 金城尚美（2005）「外国人留学生との相互交流活動による中学生の気づきと意識の変容」『言語文化研究紀要』第14号，琉球大学法文学部国際言語文化学科（欧米系），111-131
- 金城尚美・金城克哉・副島健作（2006）「気づきによる多文化理解教育の分析」『Southern Review：Studies in foreign language and literature』No.21，沖縄外国文学会，29-40
- 久保田賢一（2003）「総合的な学習」における異文化間教育『異文化間教育』17号，異文化間教育学会，12-25
- 坂田浩（2004）「日本人大学生の異文化感受性レベルに関する一考察」『異文化コミュニケーション』7，異文化コミュニケーション研究会，137-157
- 佐藤郡衛（2003）「総合的な学習」と異文化間教育『異文化間教育』17号，異文化間教育学会，4-11
- 鈴木庸子（2005）「日本人学生と留学生の交流と国際理解教育ー授業外活動「ZADANKAI」の意義ー」『日本語教育方法研究会10周年記念論文集』日本語教育方法研究会，33-40
- 中村朱美・園田博文（2004）「留学生と日本人学生の混在授業における異文化理解教育ー日本文化研修と異文化交流会での試みー」『佐賀大学留学生センター紀要』第4号，佐賀大学留学生センター，33-48
- 名嘉幸一・宮平ルリ子・新垣美奈子・大城亘武（1995）「日本人学生の留学生に対する態度および意識」『外国人留学生の学習環境の整備ならびに異文化適応への効果的援助システムの研究』琉球大学教育研究学内特別経費研究成果報告書（研究代表者：名嘉幸一），50-57
- 花見槇子・橋本顕彦（2001）「小学校における国際理解教育と留学生交流」『三重大学留学生センター紀要2001』第3号，三重大学留学生センター，25-40
- 御堂岡潔（2002）「個人レベルの異文化接触」石井敏他編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書，94-99
- 宮本律子・松岡洋子（2000）「多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第22号，秋田大学，99-106
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫（1992）『異文化間能力』測定の試み『現代のエスプリ299：国際化と異文化教育』至文堂，201-214

（琉球大学留学生センター）

# A Study on Educational Effect of Intercultural Exchange between Japanese Elementary School Students and Foreign Students

KINJO, Naomi

keywords : intercultural education, intercultural understanding, acceptance  
of different culture

## Abstract

The purpose of this study is to investigate educational effects of an intercultural exchange program between Japanese elementary school students and university foreign students. Thirty two elementary school students participated in this exchange program. They were asked to answer questionnaires before and after the exchange activities with foreign students. The results show statistically significant differences between the pre-questionnaire and the post-questionnaire. It is found that their initial image toward foreign students has changed to higher levels and their acceptance level of different cultures became higher than before the exchange. These results indicate that an intercultural exchange program contributes to intercultural understanding.

(University of the Ryukyus)